



景色(景観)が変わるといふこと

八久保 厚志 (神奈川大学外国語学部・助教授)

1 はじめに

景色(景観)は絶えず変わっているのだろうか。変えられているともいえるのではなからうか。景観(風景、空間)は、時間と同じで一刻も同じ状態を留めていないのは事実のように思われる。資料学として景観資料・情報を体系化し記録・分析することが重要であることは近年、景観の記録媒体の多様化によってとくに提起されるようになってきている。コンピュータやデジタル技術の高度化によって、景観は記録されるばかりでなく、過去や将来についてシミュレートできるようになっている。したがって、より詳細な資料作製のために景観・図像資料の抽出と体系化が図られる必要がある。

私たちは今回のCOEプログラム第3班での役割を、渋谷敬三らによって撮影、収集された景観写真を基に、昭和初期から現在までの景観変化について、その資料の体系化のための手法開発・構築するというテーマに設定した。同時に写真などに残された景観変化から文明史研究の深化のために“なに”を読みとれるかの分析をおこなう。その際、私は人文地理学を専攻としているので広く地理学の立場からこのテーマに関わっていきたい。

2 地理学からの視点

景観の変化は自然現象的と人文現象による変化と捉えることができる。すなわち、自然現象としての景観変化は自然からの営力、たとえば大地が動く、地震活動や地殻変動、造山運動、また、水や大気の動きによる変化、陸水や大気循環による浸食や風化作用等から理解する。一方、人文現象からの景観変化は、ヒトや資本(生業や企業等)の空間行動と空間の利用、集団や政治的意志のもとでの空間行動や空間利用の変化によって絶えず変えられ続けていると理解することができる。人文地理学からの景観変化の理解は主に、ヒト、資本、集団や政治的意志を景観変化の主体と考える。その際注意することは、景観変化を時系列変化(歴史的諸段階、先と後など)として捉えるばかりではなく、空間的な異同(場所による

違い)にも注意が向けられなければならない。景観変化は、特殊な場合と、一般的な場合が混在するからである。以下、時系列変化の考え方と空間的な異同の考え方を示しておこう。

時系列変化 写真1は現在の石川県能登半島の棚田の景観であるが、この景観が形成されてからどのような変化があったかを考えてみる。まず、田圃の形は等高線上にあることがわかる。したがって、標高が上がるごとに何らかの高さで次の田圃面がある。そしてそれが、海岸部から山頂へかけて段々に幾重にも造作されている。このような形態がいわゆる棚田の基本的な形態であろう。しかし、この景観が形成されてから何の変化も起きなかったと考えることはできない。よくみると、棚田の上部にはアスファルト敷きの国道が走っており、軽自動車も田圃面まで上り下る多少大きめの道がある。また、みかん畑などによく見られるような発動機による荷物輸送のレールも設けられている。これらは、現代になって、作業効率の向上と、労働負荷の軽減などを目的に設けられたものである。ただし、これだけではこのような一見作業効率の低い耕作形態が残存することはない。とくに戦後日本がとり続けた農業政策は、このような僻地での稲作経営を保障するものではなかったはずである。では何故残っているのか? 断定するわけではないが、日本の保存すべき景観として棚田の保護運動や施策が展開されているという要因を忘れてはなるまい。

写真2は、1995(平成7)年の阪神淡路地震直後の兵庫県神戸市灘五郷の酒造地域の景観である。周知のように、神戸市や西宮市は、かつて灘五郷といわれた酒造産地を擁していた。震災前は、瀟洒な酒蔵や店舗が軒を並べ特徴的な町並みを誇っていた。酒蔵のある町並みは我々にとって一種の安らぎを得られる町場の原風景であった。しかし、かつて日本全国に展開した伝統的な酒造業は、近代化の不徹底や消費性向の洋風化で急速に停滞へ向かった。そのため、現在では灘や伏見の二大産地の他に西条や会津若松など一部の地方都市でしか酒蔵の集積する

町並みは見られなくなっている。それに加えて今回の震災は最大の酒蔵の集積する町並みを崩壊させてしまった。現在では、灘の酒造業はほぼ復旧しているが、震災後酒造業を廃業したり、大手企業の傘下に入ったりと産業経済上の激変が見られる。一方で、伝統的な酒蔵の復旧はごく希であり、酒蔵は近代的な酒造工場に建て替えられている。このように、生産過程が、自然災害によって変化させられ、その結果、景観に大きな変化が生じることになった。このような景観変化に対して、何らかの時間軸をもって分析することが「変化」の第一義的理解であろう。しかし、時系列の変化だけで景観変化は理解できない。次のような空間的異同を理解しておく必要がある。

空間的異同 景観変化の分析で次の重要な点は、場所によって町並み景観が異なることである。写真3、4は各地の町並み景観である。写真3は新潟県と板町の町並みで雁木が特徴的な景観である。多雪地帯である板町は積雪時の交通確保のために雁木構造の町並みが遺されている。ただよく見ると、道路中央には融雪施設が設けられており、また、地球の温暖化による降雪量の減少によって写真のように典型的な冬季の景観は一年でも数えられるほどである。写真4は、石川県能登半島西海岸の漁村の中心の通りである。能登半島西海岸は日本海に面しており、冬季には降雪量は少ないが、強風に見舞われる地域である。写真左が海岸、右が山手にあたる。集落の再整備で

集落の中央を対面交通できる道路が建設され、その両脇に住宅が並んでいる。平地は少なく列村を形成している。住宅に注目すると、近在での森林資源が豊富なため、木造の住宅となっており、壁にも木材が使われこの地域を代表する通りの景観を形成している。このように、町並みの形成は場所ごとの特殊条件によって左右される。このことは「変化」の理解に空間的な視点が必要なことを意味する。なぜなら、景観変化の時系列的な理解だけでは変化の普遍性を検出できないからである。

3 景観資料の体系化

今後、景観資料の収集対象は写真や映像記録ばかりではなく、景観情報を抽出できる近代資料に拡げることが必要になってこよう。例えば、景観を地理情報として示す地図類（官製の地勢図や地形図類、私製の地図類、数値地図、関連ソフト類）、絵画（風景画、浮世絵類）、絵はがき（観光名所、風俗など）、郵便切手（特殊切手：国立公園、国定公園など）スタンプ類（風景入り日付印、観光スタンプなど）観光パンフレット類、商品ラベル類（たばこ、酒類など）などである。また、景観の認識は、視覚情報だけではないだろう。例えば、聴覚情報も体系化の対象となり得ると考えられる。滝や水辺の瀑音やせせらぎ、吹雪や春一番など風の音など特定景観を認識、連想できる音の情報も可能性があると考えられよう。



1 石川県能登半島の棚田



2 倒壊した酒蔵（兵庫県神戸市）



3 雪国の町並み（新潟県と板町）



4 漁村の町並み（石川県能登半島西海岸）